

[特別展によせて]

李朝の墨梅図

梅が早春の花として観賞され、詩歌の題材にされるようになったのは、梅の原産地でもある中国がやはり最初であったと思われます。しかし、古くはその花よりも果実に関心があり、梅は中国文化と共に薬木として近隣の諸国に伝えられたと云われております。

また、梅は気品のある色と香りが賞味される一方、次第に絵画の題材としても取り上げられるようになりますが、水墨で梅を描く、いわゆる〈墨梅〉が生まれたのは北宋時代、僧仲仁によるものと伝えられています。この墨梅はやがて〈墨竹〉、〈墨蘭〉などと共に文人画の主題として発展しますが、南宋の揚補之はそれまでの水墨の渲染（せんたん＝ぼかし）で表わしていた梅花を、線で輪郭をとって白地として表わし、樹幹、樹枝のみを没骨で表現するなど、墨梅に一時代を画しました。

元時代には中国の墨梅の第一人者に称えられる王冕（おうべん）がより華麗な様式を完成させ、更に文人画家の呉大素が『松斎梅譜』という、墨梅の画論書を著すなどして、墨梅は元時代に最盛期を迎え

たと言えます。

韓国では高麗時代にそれが伝わり、梅に松・竹を加えた「歳寒三友」、あるいは竹・菊・蘭と組合せた「四君子」などとして文人間でもてはやされたようです。文献では鄭知常や車原頰などの文人が墨梅を描いたことが知られます。

李朝初期には名家、安堅（あんけん）も墨梅を描いています。これも文献から知られるだけで、作品は今日遺っておりません。その文献は李朝初期の有名な文人、申叔舟（1417-1475）が1445年に著わした『画記』で、これによれば李朝第四代世宗王の第三王子、安平大君李瑔の書画コレクションの中に安堅筆の墨竹梅図一点が認められます。このコレクションは合計222軸の書画から成っており、中国の宋・元時代の作品がそのほとんどを占めていますが、その中に王冕の墨梅図五幅（各々に詩賛あり）が見られるのが興味を引きます。

李朝中期には多数のすぐれた士人画家によって墨梅の分野でも新しい境地が開かれています。その主要な人物は魚夢竜（1566-?）、

趙凍（1595-1668）、許穆（1595-1682）、呉達濟（1609-1637）、趙之耘（1637-?）などですが、その中でも特に魚夢竜の作品が重要です。彼は梅を折れた太い枝と、新たに芽生えて真直ぐに伸びた細い若枝を形態的に対照させ、折れた太い枝の表面を飛白のように墨を塗らずに白く残し、更に枝の左右に濃墨の点を散らすなどして、色彩的にアクセントを付ける工夫を大胆に試みています。この特異な様式は彼以後の李朝墨梅の一典型を成すに至っています。これらの李朝中期の墨梅は中国とは明らかに異なる特色をもってあります。それは花が満開の梅よりも、枝の端雅な形態の方により表現の重点が置かれている点です。

李朝後・末期の墨梅は前代の伝統を引き継ぎながら、その末期には明・清の梅画の影響を新に受けて、多様な展開を見せています。その主な担い手として朴東普（生没年未詳）、趙熙竜（1797-1859）、李公愚（1805-?）、許維（1809-1892）、張承業（1843-1897）などを挙げることが出来ます。

まず、朴東普は図画署の画員で、1711年（正徳元年）に通信使に随行して来日していますが、日本滞留中に「孟浩然訪梅図」などの作品を描き遺したり、江戸中期の代表的な文人画家の祇園南海の墨梅に影響を及ぼしたりしたようです。しかし、この期を代表する墨梅の

画家は趙熙竜で、彼は号の一つに梅叟を用い、梅花百詠の詩を作り、住居を「梅花百詠樓」と名付けるほど、梅を深く愛好しました。その代表作、「梅花書屋図」は彼の書風にも似て、闊達な筆致で梅花満開の中に埋まるかのような書屋が近代的な感覚にみちて描かれています。

最後に写真で示した李公愚の墨梅図屏風について御説明いたします。李公愚は字を公汝、号を石蓮・六玩堂・荳江樵夫などと言った士人です。官は敦寧府の都正（正三品）に至っておりますが、その経歴は余り詳しく知られておりません。ただ、『紅葉樓続懐人詩録』という書物によりますと、彼は1853年に金正喜と権敦仁のお伴をして、何処かの禅房に遊んでおり、その際彼は梅の絵を描いて両先生からその出来映えを大変賞められています。彼よりも20才ほど年長で、しかも当時の第一級の文人であり、またともにすぐれた書画家の二人と交際があったということは、彼もすぐれた資質をもち、まためぐまれた身分の人物であったことを暗示しています。

李公愚は梅画を善くしたと伝えられていますが、この墨梅図はまさにその伝称の正しさを証明するものと言えます。これは新出の作品で今回の展覧会で初めて紹介されますが、従来彼の代表作とされてきたソウル・国立中央博物館所蔵（徳寿宮美術館旧蔵）の「梅図」双幅に勝る大作と言えます。十曲の大画面の中央に幹を置き、その左右に大きく枝を伸ばした梅樹は、満開の花々の清香があたりを充たしているかのように、その様は美事という他はありません。いみじくも、この作品に李朝の墨梅の長い伝統の成果が結実しているのではないのでしょうか。

屏風の両端に自ら七言詩を書いています。この詩が自作なのか、あるいは中国の何人かの詩を引用したものかはまだ判かりません。詩の内容から見て、中国人の作のように思われます。（吉田宏志）

梅図屏風 李公愚筆



季刊 美のたより No.78

昭和62年 2月19日

発行 大和文華館